

「母性」言説と文学における「母性」研究の課題

戸 田 由紀子*

Motherhood Discourse and Research on Mothering in Literature

Yukiko TODA

現在日本社会で一般的に流布している「母性」の定説は、乳幼児期、とりわけ3歳まではきわめて子供にとって重要な時期であるため、実母が育てるべきであり、そして子供を産んだすべての母親には本能的に自分の子供を養育する能力を備えているというものである。このような定説に対して、それは近代社会とその家族観とともに誕生した言説にしか過ぎない、つまり何の科学的根拠もない神話にしか過ぎないとして、日本のフェミニストからは、それぞれ「3歳児神話」や「母性愛神話」として批判的な意味を込めて呼ばれるようになった。1998年には、少子化問題の対策の一つとして、『厚生白書』で、3歳児神話は「合理的根拠」がないと断言している。にもかかわらず、依然として育児＝母親という図式は根強く一般の日本人に存在しているのが現状である。保育園に幼い頃から預けるのは「かわいそう」なことであり、また「将来の夢は結婚して専業主婦になって子供を育てること」が多数の日本人女性の声である。

そういった日本とは異なり、欧米では知識人だけではなく、一般層のなかからも母性の定説への問いかけが1980年代以降幅広く行われている。日本と欧米諸国とのこの違いの理由には、日本が民族の多様性の低い国であるということと、日本人が血縁を重視し、実の子との関係を前提にしていることがあげられる。欧米では、現代ポストモダン社会における科学技術の発展によって、さまざまな変化が母性の概念にもたらされた。医学が進み、産む女性が必ずしも母親と同一人物とは限らなくなったのである。1) 卵子を提供する人、2) 産む人（分娩）、3) 授乳する人（哺乳）、4) 代理母と契約した人、5) 法的に養育することが認められている人、6) 実際に養育する人、が異なるという「母」の混乱が起こった。それによって、産んだ実母が本能的に養育する最適の能力を持っているのでそうすべきであるという前提は成り立たなくなっているのである。アメリカでは人工妊娠中絶を合法化するかしないかは未だに大統領選挙を左右するほどの大きな論争となっている一方で、代理出産や養子縁組は認められている。中絶王国と世界から称される日本であるが、血縁を重視するためか、代理出産や養子縁組は一般的ではなく、また、代理出産の子供は現在でも法的に実子として認められていない。養子や代理出産が受け入れられて

* 国際コミュニケーション学部 国際言語コミュニケーション学科

いるアメリカではもはや「母性」が本能かどうかという問題は「母性」研究の重要な論点とはなっていないが、日本では「母性」が「本能」であるかどうかといった議論が未だに続いているのは、そういった背景からにもよると考えられる¹⁾。「母性」が「本能」であるかどうかといった狭い議論を続けるのではなく、アメリカでは、近代社会が産んだ「母性」の言説がいかに狭義であるかを指摘し、より多面的に「母性」を再定義し、表象し、提示しようとすることに力点が置かれている。この小論では、アメリカで近代資本主義社会の核家族における「母性」の言説がどのように作られてきたか、現代ポストモダン社会でそれに対してどのような問いかけや批判があったが、また、どのような新しい「母性」の定義、表象が黒人文学のなかで提示されてきたかを把握した後、その問題点を考察することによって今後の「母性」研究の課題を考えてみたい。

第一章：近代アメリカ社会の「母性」

アメリカでは植民地時代から工業化により生産が工場に移るまで、家庭は外の社会と切り離された憩いの場ではなく、生産や仕事の中心であり、社会生活の一部であった。家庭では、男性も女性も子どもたちも日々さまざまな仕事、食料調達（豆まきから保存食品を作るまで）、獲物の毛皮の処理、ハーブ作り、織物や洋服作り、石鹼や蝋燭作り、人の介護、若い世代への技術伝授などに追われていた。近代以前においては、子供は「小さい働き手」として認識され、女性が子どもたちの要求だけに専念できる時間はほとんどなかった。女性も子どもも日々の生活のさまざまな仕事に追われ、仕事は肉体的にもきつく、多様であった。コミュニティの他の住民と共同でする仕事も多かったため、家庭と社会生活は連動していた。子どもたちの死亡率は高く、女性たちの寿命も短いため、栄養失調、飢餓、病気などに日々脅かされている「命」に対して必要以上に執着する余裕もなく、また母子関係が美化されることもなかった。育児と憩いの場としての家庭を守ることは女性の主な仕事には成りえなかったし、子どもと母親は家庭という領域内で孤立した関係には置かれなかった。近代以前、母親になること、そして子を育てることは今日のように複雑ではなかった。また、母性と育児適性は必ずしも直結していなかった。母親も多くの場合働いていたので、育児は祖母や乳婆や村落の共同体が行う場合が多かった。

工業化以降、生産過程は工場などへ移転し、労働者階級の人々によって生産が行われるようになってから、工場で働く必要のない中・上流階級の女性たちに余暇というものができる。余暇の時間を、自分の子供を育てるために使うべきだという育児観はそういった近代家族が誕生してから出てきたのである。そして子供は「小さな働き手」から未来の国家を支える貴重な存在へと人々の意識のなかで変化した。このような近代の母親と子供の概念の誕生とともに、母性愛や母性本能が賞賛されるようになり、それが女性の理想的特質と考えられるようになった。男女は平等ではなかったが、家庭を守り、未来の国家を支えることとなる子供たちの養育を担当する母親の地位は社会的にも上がった。

アメリカ革命（1763-1789）の時期、イギリスから独立を獲得するためには共和制の理念を十分に理解し、未来の新共和国の人材を育成する母親たちが必要であると国は考えた。国家レベルでのより良い人材育成を任された母親たちは後に「共和国の母」（“Republican Mothers”）と呼ばれるようになる。「共和国の母」の理念は1760から1800年

までに発達したものであるが、その後19世紀にも続いていき、今日も完全には無くなっていない。19世紀のアメリカの産業革命以降、男女の役割分業化が進むと、「家庭性の崇拜」(“Cult of Domesticity”)や「真の女らしさの崇拜」(“Cult of True Womanhood”)が中・上流階級の白人女性、特にニューヨークやマサチューセッツ州などアメリカ東部に住む白人女性の間で広まった。「真の女性」は敬虔 (piety)、純潔 (purity)、従順 (submission)、家庭性 (domesticity) といった4本の基本的な美德の柱で成り立っていた。女性は男性より宗教的、精神的で、心も肉体も純粋であると信じられていた。また、永久に自立できないため常に男性によってすべてを決定してもらわなければならない存在であると考えられた。外の世俗的社会で男たちが不道德な行為をしてきても、家に戻れば純粋で道徳心の強い妻に癒される。女性は妻として夫に「家庭」という避難所を提供し、忠実で従順な妻として夫を影ながら支える役割を担っていた。またそういった道徳心の強い母親たちは、未来の共和国を支える子供たちの教育にも最も適していると賛美されるようになる。

アメリカの白人女性の「母性」イデオロギーは、「共和国の母」、「家庭性の崇拜」、そして「真の女らしさの崇拜」といった三つの理念によって構築されたのである。中・上流階級の白人女性は宗教的、社会的に重要な役割を与えられるようになったが、同時に女性は家庭という閉じ込められた領域に入るようになった。20世紀の世界大戦時期には、戦場に駆り出された男たちによって生じた労働力の不足を補うために多くの女性たちは外へ働きに出るが、第二次世界大戦後、女性は再び家庭の領域に戻り、育児と夫のサポートが女性たちの最も重要な役目として賛美されるようになる。そして20世紀の情報化社会のなか、中・上流階級の白人女性たちの「母性」のイデオロギー（今後は近代「母性」のイデオロギー）が、広く深く世の中の常識として定着していく。そして階級、人種の異なる女性たちは、そのイデオロギーに当てはまらないとして排除され、さまざまな否定的なステレオタイプで定義され、社会から糾弾されるようになるのである。

第二章：近代「母性」のイデオロギーへの批判

アメリカでは1960年代に一部のフェミニストから近代「母性」のイデオロギーに対する批判が浮上してくる。「家庭の天使」としての女性の役割、つまりよき母／妻として子供と夫の健全な生活を支えることが女性の最も幸せな生き方であるということに最初に疑問を投げかけたのはベティ・フリーダンである。1963年に出版された『新しい女性の創造』(*The Feminine Mystique*)では、満たされているはずの人生なのに、どこか満たされない空虚さに日々襲われる女性たちの現状を指摘した。毎日同じ家事や育児に追われながら、無力感と脱力感といった「名前のない病」を感じる女性たち。いかに家庭に閉じ込められていることが満たされないかということを訴えたこの著書は、当時多くの白人女性の共感を得た。その後、近代社会のなかで構築された制度としての「母性」論が、エドリアン・リッチの *Of Woman Born: Motherhood as Experience and Institution*、ドロシー・ディナースタインの *The Mermaid and the Minotaur: Sexual Arrangements and Human Malaise*、ナンシー・チョドロウの *The Reproduction of Mothering: Psychoanalysis and the Sociology of Gender*、アン・カプランの *Motherhood and Representation: The Mother in Popular Culture and Melodrama* といったフェミニストの著書のなかで次々と展開される。カプラン氏は、

「母」という存在が近代核家族という制度のなかで本質化され、それが人々の無意識に取り組まれ、女性を服従させ、性的崇拜物に仕立て上げてきたと指摘する。女性の主体やアイデンティティは「母」としてのみ存在するのであり、母ではない女性は排除されてきたが、「母」という役割は女性の主体の一部にしか過ぎず、子供と接しているときにのみ「母」であるのであって、固定されていない、流動的な、非本質的なものでなければならぬと指摘している。

近代「母性」のイデオロギーへの批判は、近年大幅に変化した女性のライフスタイルと共にさらに強くなった。第二派フェミニズムの流れのなかで、それまで家庭に閉じこもっていた女性の多くは外で働くようになった。外で仕事をし、子供を保育所やベビーシッターに預ける。子供を母親だけが見るということは事実上不可能となっており、イデオロギーと実生活との大きな溝ができたのである。

近代「母性」が構築されたイデオロギーにしか過ぎないと理解される一方で、多くの母親は「母性」言説が打ち出した理想的な母親像に何らかの形で囚われている。21世紀、アメリカでも多くのアメリカ人女性が、理想的な母親像から生じるさまざまな問題に悩まされていることが、*Encyclopedia of Women and Sexuality*の母性の項目にあるカプラン氏による「母性：変化する側面」(“Motherhood: Its Changing Face”)の内容からも把握できる。ここでカプラン氏は理想的な母親像に当てはまらない母親を悪い母親として糾弾する社会の現状を説明している。良い母の神話としては以下のようなものがある。

- 神話その1) 良い母の基準は完璧を子供を育てることである
- 神話その2) 母は限りないいたわりと慈しみの源泉である
- 神話その3) 母は生来的にどのように子を育てるべきかを知っている
- 神話その4) 母は怒らない
- 神話その5) 母は父より劣っている
- 神話その6) 健全な子供を育てるためには専門家のアドバイスを必要とする
- 神話その7) 母はあらゆるものに飢えている
- 神話その8) 母娘が親密であることは健全ではない
- 神話その9) 力強い母は危険である
- 神話その10) 専業主婦でも仕事を持っても両方悪い母である (Caplan)

上記の神話はお互い矛盾した点もあるため、いかに母性の言説が次々に生み出されたかが理解できる。専業主婦でも働いていても、どちらにせよ子供に対して悪い影響があると考えたり、良い母は生来的に子供の育て方を知っていると同時に専門家の知識を得なければならなかったりと、かなり矛盾している。そのため今日多くの母親たちはどのように子供を養育したら良いのかが分からなくなっている。しかし矛盾を感じながらも多くの女性は意識的にも無意識的にも理想的な母の神話に忠実であろうとしてきた。子供に何かあったとき、あるいは、働く母親や怒ってしまう母親が罪の意識を感じるのはその証拠である。それは、母親が決して怒らないように常に感情のコントロールをした19世紀アメリカと同じである。当時感情をコントロールできない人は異常だとみられたため、必死に努力して自分の感情を抑えることを学習した。19世紀においても、21世紀においても、理想的な母親像に当てはまらない母親は悪い母親として社会から排除され、糾弾されるのである。そしてこういった根強い母性神話に対する批判や議論は、フリーダン以降現在も続

いている²⁾。

そもそも北米では白人女性でなければ既に「良い母親」から除外され、さまざまなステレオタイプでみられるようになる。歴史的に「良い母」とは、「結婚をしていて、異性愛者で、白人で、肉体的／精神的障害を持っていないで、専業主婦で、夫が経済的に支えてくれていて、夫と子供と家かマンションに住んでいて、子供たちの生物学的な母親である」(Caplan 786) が必要である。この定義から外れているために、黒人の母親は威圧的であるとか、アジア系の母親は消極的であるといったステレオタイプで見られるようになるのである。また、同性愛者や労働者階級の人々も「良い母」の定義からは除外される。

北米では1980年代後半からマイノリティに焦点を当てた「母性」研究が活発に行われるようになった。1980年代後半にはジェネット・スティックニーがトロントで“Don't Blame Mother”という学会を開催し、またゴダード大学ではジェイン・プライス・ノウルズやエレン・コールが“Woman-Defined Motherhood: A conference for Therapists”という学会を主宰した。そして1997年からはカナダのアンドレア・オーレイリー (Andrea O'Reilly) とシャロン・アビーが毎年「母性」をテーマに学会を開いており、1998年には Association for Research on Mothering が立ち上げられた。それまでにも主流文化における黒人やマイノリティの母性の分析は行われてきたが、この時期からはアフリカ系、カリブ系、アジア系、インド系、ラティーノ系といったマイノリティ文化において、母性がどのように表象されているかという考察が行われるようになった。次の章では、マイノリティのなかでもアフリカ系アメリカ人に焦点を当て、最近の黒人女性文学における「母性」をテーマに扱った研究を紹介したい。

第三章：黒人文学における「母性」研究と今後の課題

2000年以降、マイノリティの「母性」研究はアメリカでも日本でも注目を浴びている。第二派フェミニズム運動以降、アメリカ文学研究において、母と娘の關係に着目した研究は幅広く行われてきたが、それらはほとんど娘の立場に焦点を当てた研究であった。ここ数年間は、母親がどのように表象されてきたか、母親の語りはどうなっているのか、母自身語ることが可能なのかどうかといったことに注目が寄せられている。この章では、アフリカ系アメリカ人作家であるトニ・モリスンの小説における「母性」について論じた最近の研究を二つ紹介し、このテーマを取り扱う際、どのような点が難しいかということを検討しつつ、今後の研究課題を考えていきたい。

アンドレア・オーレイリーの『トニー・モリソンと母性——心の政治学』(2004)と『アメリカ・マイノリティ女性文学と母性——キングストン、モリソン、シルコウ』(2007)は最近アメリカと日本で出版されたモリスンの小説における「母性」について考察した研究書である。

母性について論じるとき、それが持つさまざまな側面を総括的に論じることは非常に難しい。オーレイリーと杉山氏は母性をテーマに扱っているが、さまざまな側面がある母性の一部の要素に限って論を進めている。近代以降さまざまな「母性」の言説が生まれると同時に、「母性」という概念が非常に多様な側面を表すようになった。一般的には1) 性

質、2) 本能、3) 機能(『母性を解説する』)、あるいは「母性」は本能的なものではない、という見方によって、最近では、1) 社会的、2) 感情的、3) 生理学的(『岩波女性学事典』)といった形で大きく分けられ、それぞれの要素を総合的に捉えることが必要とされている。より細かく見ていくと、それぞれの側面には次のような要素が含まれている。

1) 社会学的な側面

- a) 個々の時代、地理的な場所において文化的に構築された制度。
- b) アイデンティティを個人に与える。
- c) 政治的な側面。女性の生殖は歴史的に国、政府に支配されてきた。先進国では不妊治療、第三世界では避妊の強制といった形で女性の体は人口調節のために使われる。
- d) 母親業としての側面。子供を保護し、養育し、愛し、社会化し、自立させるといった母親の総括的な仕事を指す。
- e) 文化(宗教、芸術、文学)で表象される象徴要素としてのイデオロギー。豊穡、大地、原始世界、聖母マリアなどの象徴として。

2) 感情的な側面(子供と母との間の感情的、精神的な関係あるいは絆)

3) 生理学的な側面

- a) 妊娠、分娩、哺乳といった身体的機能。
- b) 育児適正が本能的なものかどうか。

オーレイリーの場合「母性」を主に1) d) の「母親業」(“motherwork”)と同意語として使っている。オーレイリーは、モリスンが1) 子供たちを肉体的、精神的に守り、2) 子供たちにどのように自分の身を守ればよいのかを教え、3) 幼少期に傷を負ってしまった大人たちを癒すために、母親業がいかに重要であるかを描いていると説明する。そして母親業の最も大切な義務として、子供を1) 保護し、2) 養育し、3) 文化を伝承し、そして4) 癒すという役割をモリスンが登場する母たちに与えていると説明する。「モリスンの描く母親たちが抱える問題は、仕事と家庭をどのように両立するかではなく、人種差別と貧困と戦うために、こういった重要な母親業をまっとうできるかどうかなのである」(O'Reilly 42)という箇所からも、社会的なアクティビティである母親業を中心に「母性」という概念を考察していることが理解できる。

杉山氏によるモリスンの『パラダイス』における「母性」の考察は、オーレイリーののような母親業に携わる実質的な母親を考察するのではなく、象徴的な側面に着目している。中国系、アフリカ系、ネイティブ・アメリカンを代表するキングストン、モリスン、そしてシルコウといった3人の女性作家は、女神や「権威ある母」といった新たな母のイメージを提示することによって、家父長制に染まった現在の母親のイメージを転覆していると主張している。モリスンの『パラダイス』論では、その「権威ある母」のモデルとして、カンドンプレ(西アフリカのヨルバ族の宗教を起源とするブラジルの宗教)の女神イエマンジャーをモデルとした女神ピエダーデと、女神信仰の司祭となるコンソラータをあげている。そしてこの「権威ある母」が、近代母性のイデオロギーに縛られた女性たち、あるいはそれを強要される女性たちの精神的な支えになっていると説明する。そして「母親の権威が女性を精神的に支えているならば、自分自身をもほかの女性をも、愛情と教育をも

たらず人間関係を築くために犠牲にする必要がない」(杉山 168)と説明するのである。しかし『パラダイス』の母親の言説は、多様性を包有し、しかも多様な女性の語りを、その権威でひとつにまとめていくことに成功している」(杉山 168)と結論づける一方で、象徴レベルでの母親の権威が、具体的にどのように母親たちが抱える問題を解決するかは示されていない。

オーレイリーや杉山氏の例が示すように、「母性」の一部の側面や要素についての考察はしばしば行われてきたが、それらを総括的に考察することは難しい。母親業、そして象徴としての母性が、現在非常に複雑化した「母性」という概念のどの辺りに位置づけられるかを示し、「母性」の他の要素との関係を説明した上で総合的に考えていく必要がある。

二つ目の「母性」の扱いにくさは、それまでマイノリティに付けられた否定的なイメージを払拭するために、しばしば肯定的なイメージだけが強調されるという点にある。オーレイリーも杉山氏も「母性」のポジティブ性を前提として論述している。提示されている母親のイメージは肯定的なものであり、「母性」が同時に孕み得る否定的な側面に対しては述べられていない。オーレイリーは、モリスンの描き出す母性が、「肉体的、精神的な健康と民族の政治権力の強化をアフリカ系アメリカ人およびその文化にもたрасることができる」(O'Reilly 12)と主張する。確かに、オーレイリーが指摘するように、モリスンの提示する「母性」は民族の強化や癒しを与えるが、と同時に、破壊的な側面も内包していることにも留意する必要がある。杉山氏が主張する「権威ある母」もまた、万人に癒しを与える存在であることを説明しているが、どこか影を持った存在であることには触れていない。女神信仰の司祭となったコンソラータは、司祭になる以前の経験が影の部分となって司祭となったコンソラータの存在に不気味さを与えている。またピエダーデも、美しい声で歌っているが、その不思議な概観や廃れた海辺の景色とのギャップは、ピエダーデの計り知れない影の部分も想起させる。ここでは取り扱われていないが、例えば『スーラ』のエヴァは、窓から身を投げて、火で燃えて悶える娘ハナを助けようとするが、と同時に、心的外傷後ストレス障害で麻薬中毒になった息子に火をつけ燃殺してしまう。母親であるモリスンの小説において、悪は排除されるべきものとしてではなく、共に存在するものであることが示されているが、同様に、人間の中の善と悪は共存している。モリスンの描く登場人物に否定的な部分を全く持っていない人物はいない。

三つ目は、マイノリティ文学の研究者が、それまで排除されてきたマイノリティの人々の主体性を取り戻すために、しばしば民族「特有の」性質に着目し、民族中心主義に加担しがちであるという点である。オーレイリーもアフリカ系アメリカ人「特有の」母性の伝統が存在すると主張し、その特質をあげている。オーレイリーは母性が人種によって分類されていると主張し、白人とは異なるアフリカ系アメリカ人独自の「母性」の特徴を以下の5点にまとめている。

- 1) 「他の子供の面倒をみることと共同育児」(“othermothering and community mothering”) (O'Reilly 5)。育児はコミュニティ全体の共同責任であり、実母一人に任された役目ではない。もちろん母と子の関係は重視されているが、母親業はコミュニティ全体で行うものである(西アフリカの伝統に由来するもの)。
- 2) 「社会的積極行動主義および力の場としての母性」(“motherhood as social activism and as a site of power”) (O'Reilly 7)。黒人の母たちはコミュニティ全体の母として、

コミュニティの子供たちを教育し、彼らの政治的、社会的意識を高め、民族全体の向上のために活躍してきた。

- 3) 「母親中心性」(“matrifocality”) (O'Reilly 9)。母親中心の社会では、女性が社会的、文化的に重要な役割を果たし、妻としての役割よりは、広い意味での「母」としての役割が重視されている。女性たちは経済的にも自立しており、重大な決定権も持っている。アフリカ系アメリカ人の家族は白人家族とは異なり、核家族ではやっていけない場合が多いため、母が子供の全責任者ではない。黒人の母親業にとって仕事をして経済的に支えることはその重要な役割の一部 (O'Reilly 10) であるため、白人のように専業主婦になって男性に経済的に頼ることは一般的ではない。そのため男女役割分業もはっきりしておらず、男女間の差はほとんどないのがその特徴である。
- 4) 母親にとって子供を育て、家庭を提供するということは抵抗の手段を教えるということの意味する (O'Reilly 10)。白人にとっての“home”は政治的に中性であるが、黒人にとっては差別される子供たちに抵抗する力を与える政治的な場である。
- 5) 「母系——文化的継承者としての母」(“the motherline: mothers as cultural bearers”) (O'Reilly 11)。アフリカ系アメリカ人社会にとって「母系はアフリカ系アメリカ人の文化における祖先の記憶、伝統的価値を表している」(O'Reilly 12)。アフリカ系アメリカ人の文化では、母親から娘へと伝統文化が引き継がれる。

しかしここでオーレイリーがあげている特質は、アフリカ系アメリカ人の性質であることは確かであったとしても、彼ら特有のものとは限らないものがある。例えば、共同育児や母親が伝統文化を伝える役割を果たす慣習は他の文化も共有する。都市部以外では、村落や共同体で子供の面倒をみる慣習が今でも続いている。ここでの問題は、オーレイリーが白人中産階級女性とのみ比較していることにある。白人ではない人、中産階級以外の階級の人は、ここに述べられている特質に当てはまる場合が多い。また、白人女性が主にいつくしみ育てることを重視するようになったのは近代であって、死亡率の高かった時代には子供をまず死なせないようにすることは必要であったし、生きるために必要なさまざまな技術や知識を伝達する義務もあった。また現代社会特有の銃や麻薬といった危険から子供たちを保護する必要は黒人に限らず他の母親たちにもある。オーレイリーと同様に、多くのマイノリティ研究者は、それまで排除されてきたマイノリティの権威を復活させるために、民族特有の伝統文化や価値観を主張する。それは民族の強化にとっては非常に重要なことであると同時に、民族には収斂することのできない階級やセクシュアリティの多様性を無視することになってしまうのである。

最後に指摘したい点は、現代黒人女性文学の研究において、近代「母性」のイデオロギーと黒人女性たちの接点についてはあまり触れられていないことである。オーレイリーのように、白人とは異なる黒人特有の母性を強調する際、白人の「母性」イデオロギーが黒人に及ぼした影響に触れることはほとんどない。しかし黒人女性が19世紀より、さまざまな形で近代「母性」のイデオロギーとの接点があったことを捉えておくことは重要である。そのためにはまず、白人の理想的母親像のもとでは、家庭の領域での活躍だけが強調されがちであるが、白人女性らが女性の生来の美德とされた道徳心と宗教心を楯に、奴隷解放運動、禁酒運動、女性参政権運動、救貧や売春婦の救済といったさまざまなボラン

ティア活動を幅広く行っていたことに留意する必要がある。つまり、白人女性は「母性」のイデオロギーを上手く利用して、公的な場でも活躍してきた。そして黒人女性もまた、当時流布していた「母性」のイデオロギーを利用して、奴隷解放運動に参加してきた。19世紀には白人とともに奴隷解放運動に携わり、また、演説や奴隷体験記などを通して白人中産階級の女性たちに奴隷制の残酷さを訴えてきた。その際、同じ子供を持つ母親として共感、同情を促すレトリックは意図的に使われたと考えられる。

リー氏も指摘するように、1861年に奴隷体験記を書いたハリエット・ジェイコブスは、奴隷制への抵抗の手段として、彼女のペルソナである主人公リンダの母性的な側面だけを前面に押し出している。その後1890年から1910年の間には黒人女性作家による小説が数多く出版された。それは当時小説が、さまざまな差別や抑圧から民族を解放するための効果的な文化的／政治的な戦略として考えられていたからである。そのなかにフランシス・ハーパーやポーリーン・ホプキンズがいる。ハーパーは、黒人の教育は、アティカス・ヘイグッドを始めとした白人男性が提案したタスキーギ大学などの機関ではなく、黒人女性が家庭、教会、コミュニティのなかで行うべきであることを小説のなかで提唱している。ロビン氏が指摘するように、白人の提案する教育モデルは、黒人は肉体労働しかできない、白人より劣る人種であるという前提に成り立っており、家庭で子供を教育するといった一見現在からは保守的にみえるハーパーの小説は再評価に値する。ハーパーと同様に、ポーリーン・ホプキンズも、彼女の小説 *Contending Forces: A Romance Illustrative of Negro Life North and South* (1900) のなかで、二人の黒人女性が受けた性的・人種的暴力を告発する。バーグ氏が指摘するように、ホプキンズは近代「母性」のイデオロギーを用いることによって、過度に性的であるという黒人女性のステレオタイプを取り除きつつ、民族強化に貢献する「民族の母」という黒人女性像を打ち出しているといえる。

このように、ハーパーやホプキンズやジェイコブスを始めとした19世紀の黒人女性作家は、ヴィクトリア朝の母性イデオロギーを利用することによって、民族の地位向上を図った。そしてそのような母性の政治学は、まぎれもなくモリスンの『ピラヴド』にも引き継がれている。よって、近代「母性」の概念と18世紀末からでてきた白人女性たちのさまざまな宗教活動との関係を検討すること、そしてそれに黒人女性がどのように関わってきたかを見ていくこと、さらに、その流れのなかで20世紀、21世紀の黒人文学における母性の表象を考察することは今後の重要な課題であるといえる。

注

- 1) 母性愛は神話であると主張する大日向雅美氏を始めとするフェミニストの主張の反対者に『母性の復権』の著者である林道義氏がいる。しかし林氏の反論は、結局母性愛神話論者と同じことを主張している。林氏は母性が「本能的なものであり、超歴史的な性質を持っていること」(100)を主張しているが、林氏の本能の定義とは「いついかなる場合にも無条件で発現する」ものではなく、いくつかの条件、つまりリリーサー（本能行動を解き放つ刺激）が必要であるというものである。さらに、「母子や家族のあいだの心理的な絆が生得的だということの意味は、生まれるという物理的事実によって機械的に愛情が現れるという意味ではなく、愛情が感じられるようになるメカニズムが生得的に備わっているという意味なのである。したがっ

て、その生得的なメカニズムが壊されるようなことがあれば、母子の愛情は育たないのである」(74)と説明する。一方、大日向氏や日本のフェミニズムが引用するバイブルであるエリザベート・バダンテールの『母性という神話』(*L'Amour en Plus*)では、母性本能は神話であり、「母性愛」も一つの感情に過ぎず、「それ自体、まったく偶発的なもの」(448)であり、そこにはなんの「普遍性」もみられず、母性愛は「付け加わったもの」なのでであると主張(448)している。しかしバダンテールは「母性愛は人類始まって以来存在してきた、と確信して」おり、ただ「それが必然的にすべての女性にそなわっているとは思わないし、種の存続がこの愛情だけによるものだとも思わない」(020)と説明する。このように、両者とも、母性愛が機能するかどうかは周囲の環境や学習に起因するものであり、すべての女性に母性愛や母親としての機能が必ず具わっているものではないと述べている。

- 2) この「悪い母親」に対する糾弾は欧米諸国や日本など、性役割分業と核家族を基本とする近代資本主義社会で、さまざまな形で浮上してきている。例えば、日本では1970年代から密室育児にストレスや孤独感、焦燥感を感じる母たちによる育児相談所の相談や虐待相談処理件数も増えたため、母親たちは「母性を喪失した者」として糾弾されている(大日向『岩波』438)。そして「母性を喪失した母親」たちの事件が新聞等で大きく取りざたされてきた。田間泰子氏の『母性愛という制度——子殺しと中絶のポリティクス』など母親糾弾の分析を実際の新聞記事から行った研究書なども出ている。

Bibliography

- Berg, Allison. "Reconstructing Motherhood: Pauline Hopkins' 'Contending Forces.'" *Studies in American Fiction*. 24. 2 (1996): 131+.
- Caplan, Paula J. "Motherhood: Its Changing Face." *Encyclopedia of Women and Gender: Sex Similarities and Differences and the Impact of Society on Gender*. California: Academic P, 2001. 783–794.
- Chodorow, Nancy. *The Reproduction of Mothering: Psychoanalysis and the Sociology of Gender*. Berkeley: U of California P, 1978.
- Dinnerstein, Dorothy. *The Mermaid and the Minotaur: Sexual Arrangements and Human Malaise*. NY: Harper, 1976.
- Jacobs, Harriet A. *Incidents in the Life of a Slave Girl: Written by Herself*. 1861. Ed. Jean Fagan Yellin. Cambridge: Harvard UP, 1987.
- Kaplan, E. Ann. *Motherhood and Representation: The Mother in Popular Culture and Melodrama*. London: Routledge, 2004 (1992).
- Kramarae Cheri, and Dale Spender, Ed. *Routledge International Encyclopedia of Women: Global Women's Issues and Knowledge*. NY: Routledge, 2000.
- Li Stephanie. "Motherhood as Resistance in Harriet Jacob's Incidents in the Life of a Slave Girl." *Legacy: A Journal of American Women Writers*. 23.1 (2006): 14+.
- O'Reilly, Andrea. *Toni Morrison and Motherhood: A Politics of the Heart*. Albany: SUNY, 2004.
- Rich, Adrienne. *Of Woman Born: Motherhood as Experience and Institution*. NY: W. W. Norton & Company, 1995 (1986).
- Robbins, Sarah. "Gendering the Debate Over African Americans' Education in the 1880s: Frances Harper's Reconfiguration of Atticus Haygood's Philanthropic Model." *Legacy: A Journal of American Women Writers*. 19. 1 (2002): 81+.
- E・バダンテール『母性という神話』(*L'Amour en Plus*) 鈴木晶訳, 2006 (1998)
- 大日向雅美『母性愛神話とたたかい』草土文化, 2003 (2002)

- _____, 『メディアにひそむ母性愛神話』草土文化, 2003
- _____, 『母性愛神話の罫』日本評論社, 2000
- _____, 「母性」『岩波女性学事典』井上輝子・上野千鶴子・江原由美子・大沢真理・加納実紀代編, 岩波書店, 2002, 436-440
- サラ・M・エヴァンズ『アメリカの女性の歴史——自由のために生まれて——』小檜山ルイ・竹俣初美・矢口祐人訳, 明石書店, 1997 (1989)
- 杉山直子『アメリカ・マイノリティ女性文学と母性——キングストン・モリスン・シルコウ』彩流社, 2007
- ダイアン・E・アイヤー『母性愛神話のまぼろし』(*Mother-Infant Bonding: a Scientific Fiction*) 大日向雅美・大日向史子訳, 大修館書店, 2000
- 田間泰子『母性愛という制度——子殺しと中絶というポリティクス』経草書房, 2001
- 林道義『母性の復権』中公新書, 2001 (1999)
- _____, 『父性の復権』中公新書, 1996
- _____, 『家族の復権』中公新書, 2002
- 平林美都子『表象としての母性』ミネルヴァ書房, 2006
- グループ「母性」解読講座編『「母性」を解読する』有斐閣選書, 1991